

- **全体を振り返って**

全体を振り返って（講師）

研究会（地域経営塾）のメンバーより、セミナーの感想、メッセージをいただきました。

岡田憲夫（京都大学）



地域経営塾は、「未来塾」である。必要に迫られ、時代の波に後押しされて、日本のそこかしこで今進む「まちづくり」や「地域活性化」。参加型のコミュニティマネジメントが当惑げに、でもしっかりと地域に芽を出し、多彩な花を咲かせつつある。中心で関わるのはたたき上げ世代だ。彼らが試行錯誤でイニシアティブをとってきた。いわば「地域経営未分化時代」の玄人である。しかし、これからは、それが「地域経営」という専門分野に育ち、ノウハウが伝授されなければならない。「地域経営診断士」や「地域経営アドバイザー」といった職種が新しい世代を引き継ぎ、プロとしての技量を発揮する。そのような人材に育てるための「小手調べ」をする。それがこの未来塾の狙いである、と私は考える。

実は地域経営時代の扉を開けるのは、共同作業である。私たち講師陣と支援スタッフ、それに皆さん方、受講生が手を携えて行うのである。「未来塾」とはそのような未来への扉を開ける共同作業の、小手調べの学校であった。

二年間の小手調べの取り組みの中で、未来の扉の感触に時として、幾度か触れたようで、私はある種の手ごたえを感じている。ときあたかも地域を吹き狂う「町村合併」の嵐は、地域が安閑として地域であり続けることはありえない時代が到来しつつあることを予兆させる。町村合併の結論がどこにあれ、地域の運命は地域の意思と実力で選び取り、競い合っていくことが求められるようになってきている。そして「地域づくりの専門家」を自認すべき私たちも、時代の求めに応じて自らを鍛錬し直さすことに向き合わなければならない。本塾はそのための道場である。小手調べから、本格的なプログラムづくりに向けて、新たな挑戦が待っている。受講生諸氏とともに挑む営みが続けられたらと念じている。

日下部治（東京工業大学）



大学に籍をおく自分にとって、2年間にわたるセミナーの感想を総括すれば「このプログラムを大学の土木工学教育に導入すれば、多くの若い学生が飛びつくことは間違えない。」と集約されよう。冷徹な技術論・設計論に終始する学部教育から脱皮して、問題解決型の地域経営を根幹においた教育プログラムを提供すれば、人間学としての土木工学の本来の魅力を学生は敏感に感じ取り、素直に嬉々として問題解決のために柔軟な頭脳を働かせるに違いない。自分にはその姿が容易に想像できる。だが、今回の2年間にわたるセミナーの濃密な内容を、どのように教育体系・教育プログラムとして具現化するかは、相当な知恵と汗、既存の教育体系の変更が要請されることも同時に感じつつある。

しかし、稚拙でも試みを開始しなければ何も始まらない。現段階でその試みを行う一つの現実的な方法は、受講生として今回のセミナーを体験した有能な技術者群と経験豊富な講師団と大学にいる我々との連携であると考えている。2年間のセミナーに参加して頭の中に熱く浮かび上がってきた小さな使命感を、早く孵化させたいと願っている。

多々納裕一（京都大学）



地域経営は将に激動の変革期にあります。住民参加がもはや当然となってきた社会資本整備、政策・事業評価の導入、さらには、市町村合併を引き金とする地域の自治構造の変革、大きな変化がここ彼処に起きています。このような変革の時であるからこそ、「知恵」と「技能」を持った地域経営者の出現が必要なのだと思います。

地方の危機は「過疎問題」が始まったところから現在に至るまで継続中ですが、そんな「地方」にも、志も知恵も技能もある地域経営の実践者の方々がたくさんおられます。2年にわたるセミナーを終えて、このような地域経営の実践者の方々とこれから地域経営を担って行こうとされている志の高い研修生の方々と直にふれあい、寝食を共にしながら「地域経営とは何か」を真剣に考える機会が得られたことは、研修生の皆さんのみならず、講師やスタッフとして参加した私共にとっても大変貴重な経験でした。

ここで培われたネットワークを大切に深化させながら、新しい地域経営の姿を皆さんと共にこれから探求していくことができたら良いなと考えています。

神田 学（東京工業大学）



地域経営アドバイザーの養成を謳って開催した2回のセミナーでありましたが、朝から晩までぎっしり詰まったハードなスケジュールで、参加者の方もかなり大変だったと思います。地域経営の手法や学問体系は確立されているわけではなく、セミナーそのものが実験的な要素を含んでいたことは否めません。そのような先験的な試みであったにも関わらず、結果として出来上がった講義録に目を通してみると、非常に面白いテキストに仕上がっていることにうれしい驚きをおぼえます。とりわけグループ学習の議事録を要約しながら、激しい議論の中に、地域経営のミソのような部分が見えてきたようにも思えました。実践経験に基づく暗黙知を形式知に置き換える作業は容易ではありませんが、岡田先生の理論を中心に「地域経営の方程式」なるものを意識することが出来ました。

小野和日児（財団法人建設物価調査会）



事業者が説明責任を果たし、官民の合意形成を整える。これからの公共事業はこれが普通のこととなります。

いま、この新しい公共事業の現場で活躍する人材を育てることが急務であり、公共事業の経験と知恵を有した技術者をこうした分野で活躍できる人材として育てることがもっとも早道である。ならば理論と実践に経験を有する先達のつくる人材育成プログラムをつくったら、どんなものになるのだろう。

齢を重ねて一線を退く年代になると、自分が遣り残したことを後人にどう託すかが、常に頭を占めます。幸い、岡田先生、日下部先生という優れたリーダーを中心に、多々納先生、神田先生の参加も得て、2年間の基礎的な勉強を経て、実践的なセミナーを開催することができました。

2回目のセミナーには参加することができませんでしたが、参加された先生および研修生各人の言葉にありますように、ようやく大枠が組み立てられ、スタートについたところかと思えます。コンサルタント・エンジニアの新しい職業が生まれることをおおいに期待しています。

秋口守國（株式会社オリエンタルコンサルタンツ）



報告書は「地域経営事はじめ」になっています。でも、今回の大きなテーマは、具体の議論として、「地域経営塾」との意識でした。さて、「地域経営塾」とは何か？それぞれの講師陣の中でも、認識は、微妙に異なります。

これを秋口なりに、悩み、考え、反省している点をお伝えしましょう。先ず言葉を分解して、

「地域」とは何か。自治体の立場から言えば、人口規模300万人を超える横浜市から、今回参加いただいた、数千人の小国町、五十崎町、智頭町などがあります。果たして地域の広がり、階層性など、この言葉をどの様にとらえ、具体的に施策立案、事業展開されているのか。どの様な役割を發揮できるのか。そして、有効なのか。

次に、「経営」とは何か。会社の経営は事業を営み、受注、生産、売上げ、利益計上のサイクルを回していきます。さて、自治体、さらにはコミュニティにおける活動、その評価、そして経営の概念を、どの様にとらえたらよいのか。それは可能なのか。

さらに、「塾」とは何か。これらの地域、経営を、支援していける、ある種の意欲、特技を持った専門家群を育てていきたいが可能なのか。現在の仕事は役人であったり、コンサルタンツに勤務していますが、部門を問わず、それらの方々に、どの様な意識、思考、技術力を付与したらよいのか。できるのか、そして妥当な手法があるのか。残念ながら、現時点では、一定の確定した解を得るには至っていません。一方で、これからの地域経営は、これまでの前例踏襲、画一的な護送船団方式、誰か有能な指導者一人で引っ張っていくことなどでは不可能です。

今回の研修を通じて、意欲ある仲間が集い、これらを語り合い、具体の演習などを通じ、一定の解が見つかりそうであり、時代の変化、地域の違い、文化・価値観を乗り越えた概念形成がなされるものと、感じています。

佐藤 浩（財団法人国土技術研究センター）



初回セミナー後に最も多かった改善要望の1つが、「『地域経営アドバイザー』の定義・イメージを明確にして欲しい」ということであり、極力これに答えられるようにと第2回のカリキュラム検討が重ねられました。異動でその第2回に参加できなかったのは残念でした。個人的には、「有形・無形の地域特有資源を掘り起こし、或いは創り出し、地域づくりに結びつけること、そのために必要な資質(人)を見極め、足りない資質を適切にアウトソーシングして、地域への愛着と情熱をもってコーディネートすること」ではないかと考えています。

その一方で、今はまだ百人百様の解釈・イメージがあってよいのでは、とも思っています。活躍のフィールドが様々な形でまだまだ試行的に発展・拡大しつつあると思うからです。「一人一人が感性を振るわせて見聞し、議論し、体験することを通じて自分なりの解釈へと帰納させる。そして、それを新たな経験に際して自分なりに演繹しつつ発展させていく」ことが大切だと思います。この観点からも本セミナーの意義は大きかったと思いますし、私自身とても貴重な経験をさせて頂きました。このような活動に参画させて頂きましたことに、ご指導賜りました諸先生方・諸先輩方・事務局の皆様、そして研修員の皆様に心からお礼申し上げます。

山口真司（国土交通省国土技術政策総合研究所）



セミナー準備に携わり、まず頭に浮かんだのは『土木技術者の視点での地域経営とは？』でした。各種社会資本整備を通じた地域づくりを既に実践しているものの、首長さんの片腕として社会資本を長期的に活用する視点でのアドバイスを行うには、『技術者としての一方的な視点だけでなく、地域の方々の立場や価値観を踏まえた視点と実践手法を修得する』ことがまず必要と考え、今回の2回のセミナーでの事例研究においては、事業立案実施の立場だけでなく立場を変えた議論や交渉をR P的に実践していただく内容としました。短時間での事例研究であったため、毎晩遅くまでグループ内検討をしていただく羽目になってしまいましたが、国・地方公共団体・民間の異

なった立場を超えた中身の濃い事例研究になりよいものになったと感じました。特に真夜中の喫煙ルームでの懇親会は強烈な印象として残っていますが、短時間であったからこそ深いつながりが生まれたとも思います。今後ともこのつながりやセミナーでの経験を本当の実践の場でも活かし、小生も地域づくりに取り組んでいきたいと思ひます。貴重な経験をさせていただきましたセミナー生のみならず、講師及び事務局のみならずには心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

奥野晴彦（社団法人建設コンサルタンツ協会）



このセミナーには、2年目だけの参加でした。ご指導いただきました皆様、準備いただいた皆様に改めて感謝と敬意を表します。

「地域経営アドバイザー養成セミナー」の「地域」、「経営」、「アドバイザー」という言葉それぞれに皆さんの思いがあると思います。これが正解という解釈は現時点ではなく、これからみんなで作り上げて行くものだと思っています。

私たちが生活し、様々な活動を行っていく基盤となる国土は、これまで多くの人の働きかけを通じて形成されてきました。この国土を、真に誇りを持てるものとして、次の世代に引き継いで行くことが、今を生きる私たちにとっての大きな使命です。国土が素晴らしいものであるためには、それを構成する地域がすばらしく、活気のあるものでなければなりません。すばらしい地域を築いて行くためには、そこに生活する人はもちろん、関係する多くの人の不断の努力が必要です。ハードな基盤整備だけでなく、ソフトなシステムや人々のネットワークがあって初めて可能になることだと思います。そのさまざまな基盤を構築するために、的確にアドバイスのできる人の存在も重要です。人々のネットワークの中でともに考え、悩みながら、一歩ずつ歩んで行く、そのような意味でのリーダーシップをもった人が求められると思います。

セミナーの参加者は、建設コンサルタントに勤務する人、国、地方公共団体の人など多くの分野にまたがっています。このことも、このセミナーの重要なポイントの一つだと思います。多くのプレイヤーが参加して議論を戦わす、その中から期待される人材が育って行くことになります。

皆さんにとって、また皆さんの後に続く人たちにとって、地域経営アドバイザーなるものが、新しい活躍の場になることを目指して、更に実践と研究を深めて行かなければならないと感じています。

全体を振り返って（前期セミナー受講生）

前期セミナーの受講生より、セミナーを受けての感想、5年後の私についてコメントをいただきました。

溝口伸一（日本工営株式会社）



1. セミナーを受けての感想

正直、「地域経営アドバイザー」と聞いて、「一体、何を指しているのか？」というのが疑問でした。しかも、講師はほとんどが大学の先生や地元で活躍されている「経営的な取り組みを無償で行う人たち」でした。

どこにビジネスモデルがあるのか？今後、ビジネスになるのか、その解を求めるための受講であったと記憶しています。

内容的には、リーダー論がその解析アプローチも含めて斬新で、興味深かったことを覚えています。

当該プログラムが若手から中堅を迎えようとする技術者育成プログラムになることを望みます。

2. 5年後の私

元来、自治体の「庁外助役」をひとつのモデル像として、コンサルティングに望んでいますが、地域経営アドバイザーが想定していると思われる業務（ビジネス）は、現在、ボランタリーの域を出ていない、というのが実際に取り組むものの感想です。

あるいは、他の業務の“ついで”の中での取り組みが見られる程度です。

これから地域主導での地域づくりがより一層進みますが、行政職員（私もそうですが）の将来予想は、地域経営に資する業務は内製化と外の力を借りる場面の拡大に分かれます。

しかし、現実には、民間活力の導入で、維持管理や建設の業務がアウトソーシングされてきていること、全体的な財政規模の縮小、そのような中で行政職員が減少する一方、コンサルタントから自治体へ転職していく人材がここ2～3年大きく拡大してきており、どうも内製化が大きなトレンドを占めつつあり、先進自治体ではコンサルタント不要、職員での取り組み、特に川上領域でその傾向が強くなってきています。

そういった中で、5年後の私は、地域経営アドバイザーに近い職務を手がけるならば、行政職員に転じるか、アウトソーシングされる業務の受託者となって間接的かより直接的な地域経営に携わるものになっていると思います。

そして現在の志向は、後者全国、あるいは国際的な視野で取り組む、を目指しています。

河崎栄一（株式会社ニュージェック）



前期しか参加できませんでしたが、セミナー受講期間は、日々追いまくられる時間の中でこれまでのコンサルタントとしての自分を振り返る機会となりました。

また、参加者の方々から刺激をいただくことで、地域経営について考える機会と実践の手がかりを与えて頂き、非常に有意義な時間でした。

このような企画を設けて頂いた関係者の方々、そして全国から参加されたコンサルマンや行政マン、事務局の方々に御礼申し上げます。

村尾重幸（熊本市役所）



仕事の都合で後期セミナーに参加できなかったことを残念に思っております。現在の私の仕事は土地区画整理事業等によるまちづくりを行なっております。セミナーでのまちづくり（地域づくり）の基本は、そこで生活する住民のために行なうものであり、主役は地域住民であり、住民主体のまちづくりを実践するためのセミナーであったかに感じております。

行政が事業として行なうまちづくりにおいても「主役は住民」と考えて現在の業務に取り組むと共に地域まちづくりを経営と考え、当該事業で激変する住環境に対して従民間のコミュニケーションを維持しつつ、住み続けられるまちづくりを地域と一体となつて進めており、個々の住民とより密接に接し、「正確な情報を多くの住民に提供する」「住民の要望・意見を聞く」ことに心がけております。

また、「住民のための事業」と考え、事業に反対の立場の方と接することにより、今まで苦痛に感じていたものが、楽になった気がします。

5年後も現在以上に住民の中に入り込み住民と一体となり「地域の特色を生かした住民主体のまちづくり」を行なっているのではないかと感じております。

小野寿宏（小国町役場）



セミナーを受けての感想

一昨年、京都大学岡田先生から突然お電話があり、町長が事例紹介する本研修会を受講することになりました。内容を見るとちょっと腰が引けそうな感じ。ただ、今回の縁をきっかけに、私たちが作っている農村情報紙「WALK」で岡田先生に原稿をお願いでき幸運でした。研修後、新聞で「ウィン・ウィン」の言葉を見るとPI（パブリック・インボルブメント）を思い出します。また、地元の方と会合することも多く、後藤先生から学んだ「アサーティブ・コミュニケーション」も、後から反省することばかり。なお、受講生は、コンサルタントの方が多くみなさん大変優秀で自分の

力のなさを反省させられました。

5年後の私（に向けて）

九州大学の木佐茂男先生は、これからの行政は小さくして、必要な人材は必要な時専門家を活用、職員はコーディネーターとなるように、と言われます。そのためには、人脈づくりが欠かせません。気持ちを積極的にしていかなければ、と反省しているところです。

全体を振り返って（後期セミナー受講生）

後期セミナーの受講生に、セミナーを受けて「5年後の自分」「明日から実践すること」「ここで学んだ何をモニターするか」について発表いただきました。

浅野正史（三井共同建設コンサルタント 株式会社）



5年後の私

10の合意形成業務、3つの地域経営に関わる業務を経験し、笑顔と自信を持って地域経営に関わる業務を実践しています。

明日から実践すること

社内外で、同僚や有志とともに技術力の向上に関すること（ファシリテーション、プロセスデザイン、直感力）の勉強会と実践を行います。

ここで学んだ何をモニターするか

四面会議システム等をもとに、よりわかりやすい合意形成システムを試行し、モニターします。

前田武（第一復建 株式会社）



5年後の私（糧・舵・絆・礎の実践）

私の5年後は地域経営のプロフェッショナルとして、現在の会社内においての後輩教育を行うとともに、地域経営の実践として、地域経営に苦しむ九州・大分県北部の人口6万人都市において、地域資源である“いらか”と街並みを礎として、その礎を基にして観光を糧に、既存まちづくり組織を舵に、行政と住民・企業・まちづくり組織を絆とした都市の再生（経営）を図っています。

明日から実践すること

明日からではなく、既に前期セミナーの後から「糧」「舵」「絆」「礎」について各市町村に提案していることから、今後もこの手法の啓発に努めるとともに、行政に対して、また、住民に対して「言葉遊び」ができる人材づくりを行っていきます。

ここで学んだ何をモニターするか

私は、ここで学んだ四面会議手法を私の理解できる形で応用し、社内教育への利用ならびにまちづくりの場で実践していきたいと考えます。

藤田章弘（復建調査設計 株式会社）



5年後の私

私は5年後に地元のまちづくりに参加しています。

現在、業務として地元のまちづくりに参加しています。この業務は、今年度で業務としては終わる予定です。しかし、今、企画している内容は、来年以降も地元住民の方で続けていくことになっています。そこで、5年後には、業務とは別に、個人として地元のまちづくりに参加しています。

明日から実践すること

成功体験モデルを真似する時は、その前後の状況を把握します。成功事例を活用する場合、地域の状況が異なることから、単に真似することは危険である。そこで、成功事例の現状分析、導入後の経過をできる限り調査の上、適用を検討します。

ここで学んだ何をモニターするか

四面会議システムのモニターを行います。四面会議システムは、多面的な側面から対策案を立案するには有効なツールであることを体験しました。この四面会議システムをどこかで活用して報告します。しかし、回数・時間に制約がある場合での活用のため、改良していることもありますので、併せて報告します。

伊原康敏（株式会社 オオバ）



5年後の私

5年後の私は子供たちが安心して暮らせる地域づくりのためのアドバイザーとして活動している。

- ・私 47 歳、妻 42 歳、娘 12 歳
 - ・コンサルは続けている
 - ・地域活動の場（マンション管理組合、町内会、PTA、まちづくり協議会等）
- 明日から実践すること

とっかかりとして、仕事以外の時間をつくる。

- ・話す機会を増やす（職場では一日PCと向き合っている日もある）
- ・聞く能力を高める
- ・付き合いの幅を広げる（友人、近所、地域、異業種等）

ここで学んだ何をモニターするか

プレストでコンセプトづくり。

- ・プロセスの中でいくつもの着地点の仮説が設定できる。

青山広幸（大津市役所）



5年後の私

5年後の私は、地域住民の活動の場がある時は冷静に見、ある時は一緒に活動し、アドバイスできる仕事をしていきたい。

- ・時代の流れ、住民のニーズ、あるべき方向を考え常に更新する。
- ・地域の一住民として、自分の地域の中で協力し活動している。

明日から実践すること

役所の人間であることの構えをはずして、一人の人間として仕事に当たる。

- ・積極的に事にあたり、言葉遊びができる余裕を持つ。
- ・たくさんの人と色々な話をする。

ここで学んだ何をモニターするか

四面会議を数多く実践します。

- ・改良、簡易化、常にフランクにできる

田澤光治（株式会社 復建技術コンサルタント）



5年後の私

高齢化が進み、娯楽が何もない私が生れた町で、町民がいきいきと暮らすためのシステムづくりに黒子（プライベート）として関わっている。

明日から実践すること

世の中のいろんな事（人）に、しつこく関心を持ちたい。“ぴか”“すじ”“いき”を常に考えたい。能動的を常に意識します。

ここで学んだ何をモニターするか

四面会議（一人二面会議）をモニターします。

八木重善（豊田市役所）



5年後の私

地域住民の一人として、地元地域のまちづくりリーダーとともに、仲間をどんどん集め、官民が一体となって、心温かい地域ができるようまちづくり活動を推進している。

明日から実践すること

地域住民の一人としては、最近、空き巣等の犯罪が多くなってきたため、まず第一歩として「安全見まわり隊」等を結成して、地域内のパトロールを進め、防犯の視点を取り入れたまちづくり活動をする。行政マンとしては、今回のセミナーの経験を職場にて研修等を行い、住民と一体となったまちづくりの必要性が認識できる職員をどんどん増やしていきたい。

ここで学んだ何をモニターするか

現在、仕事上でまちづくり活動を進めている団体において、アサーティブコミュニケーションの手法や、できれば四面会議システムの手法を使って、住民とともにまちづくり計画を作成していきたい。

川本卓史（株式会社 オリエンタルコンサルタンツ）



5年後の私

まちづくりの委託を受け、四面会議システムを使って、行政や住民等の役割分担の押しつけを見ながら、その調整役をしている。

明日から実践すること

地元のまちづくり等に関する参加自由の会議に出席し、場慣れと冷やかし（良い意味で）など「さくら」を演じる。

ここで学んだ何をモニターするか

四面会議システム。

山宮忠利（青梅市役所）



5年後の私

5年後の私は、青梅市のまちづくりの舵とりをしています。ただし、そのセクションにいればですが・・・。

明日から実践すること

明日からは、まず、住民の目線で市内の隠れた素材、問題等を探します。

ここで学んだ何をモニターするか

ここで学んだ四面会議システムの手法を使ってモニターします。

鈴木温（国土交通省 国土技術政策総合研究所）



5年後の私

研究者として特定の地域に関わり、地域の悩みを共有し、少しばかりの知恵の支援と元気の支援をしている。

明日から実践すること

興味の幅を広げ、様々な世界を知ることにもっと貪欲になる。

言葉の違いを認識する。

ここで学んだ何をモニターするか

自分の論文を書くとき、他人の文章を評価するときは「ピカ、スジ、イキ」でやってみようと思う。

大塚正治（日本技術開発 株式会社）



5年後の私
地域住民に自信を持ってアドバイスできるコンサルタント
地域住民にやる気を起こさせるコンサルタント
地域リーダーを見出すコンサルタント
課題発見型・提案型のコンサルタント
明日から実践すること
セミナーが非常に有益であったことをふれまわること。
言葉遊びを社内で広めること。
多くのまちを見て、感じ、記憶すること。

ここで学んだ何をモニターするか

機会があれば、実現化方策検討のワークショップにおいて、四面会議システムを実践します。

森山弘一（株式会社 建設技術研究所）



5年後の私
まちづくりに関わることで悩んでいる地域住民の方、行政の方、民間の方を、洗練されたファシリテーション技術と人並みの発想力と企画力で解決に導く「地域のオタスケマン」として全国を飛び回っているだろう。
明日から実践すること
ファシリテーション技術を極めるべく、日頃の業務等（ワークショップ業務、社内会議、飲み会、夫婦間の会話・・・）を通じて、実践あるのみ（場数を踏む）。

ここで学んだ何をモニターするか

四面会議システムをオリジナルに改造して実践します。

田中文夫（株式会社 建設技術研究所）



5年後の私
ファシリテーターとしての役割はまだ難しいと思いますが、地域計画のプランナーとして民意を反映するという考えではなく、「民意を前提としたプランづくり」を行っていきたい。
明日から実践すること
明日からできることとしては、これまで活用してきたアンケートや住民参加型の会議における意見への確実な応答、さらに四面会議をワークショップ等の機会に活用し

ていけるよう、そのしゅみをマスターすること。

ここで学んだ何をモニターするか

神田先生の知価、環境、世代という概念をあらゆる計画立案に関わる主体あるいは人にあてはめ、それぞれが持つ価値観の違いというものを整理できるかモニターする。

池田忠継（株式会社 日本港湾コンサルタント）



5年後の私

計画・構想づくりにおけるバリアフリー化技術の開発を実践している。例えば、都市計画図や港湾計画図は、視覚障害者はどうやって見るのか、どうやってそれらの案に意見を出していくのか、認識する上での関所が現在はあります。真にバリアフリー社会を目指す時、彼等をサイレントマイノリティにすることは得策でないと思います。同様な問題意識を抱く方とともに、計画づくりにおけるバリアフリー化技術を研究していると思います（選択肢としてNPOもある）。

明日から実践すること

明日から、まずは社内で一緒に考える仲間を探します。これが見つからなければ、我が社は結構冷たいのかもしれませんが、きっと大丈夫でしょう。

ここで学んだ何をモニターするか

ブレインストーミングを用いて、技術上の課題を抽出した上で報告します。

吉本雅彦（株式会社 長大）



5年後の私

社会資本整備における経営アドバイザーを実践しています。5年後、現状の会社、業界にいるか、いられるかはわかりませんが、可能であれば、現業界において、地域・住民を含めて社会資本ストックの管理における経営アドバイザーを実践しています。

明日から実践すること

より広く、深く、言葉の意味を理解することを実行したい。今回のセミナーでも痛感した言葉の多種多様な解釈について、共有の場面でより広く、深く意味することを理解しよう実行したい。

ここで学んだ何をモニターするか

四面会議システムの手法を使ってモニターします。四面会議の研修、特に逆の立場に立ってみること、上方から四面を眺めて見ることにより、見えなかったものや共有できるものが見えた（ような気がした）。四面会議は地域経営はもちろん、その他のマネジメント場面にも応用できそうなので、四面会議の技法を使ってモニターします。

村山大介（豊橋市役所）



5年後の私

地域でまちづくり活動をしている団体に対し、行政職員として、まちづくりの手法の提示、人材発掘、支援策の検討等まちづくりアドバイザーとしての役割を果たす。

明日から実践すること

明日からまちづくり活動が行詰っている地域のために、人材発掘、情報収集を行います。

ここで学んだ何をモニターするか

フィールドワークを地域の人と行い、モニターします。

高宮 進（国土交通省 国土技術政策総合研究所）



5年後の私

私は5年後に今の立場のまま、地域経営の支援をしています。そこでは地域経営の進め方、人材紹介、アドバイスをし、一方で住まいの周辺での地域経営に参画します。自分の子供が振り向いてくれなくなっているでしょうから、変わりに地域を育てます。

明日から実践すること

私は明日から地域経営の人材探しを始めます。まずはこのセミナー参加者の名前、住所、電話番号、E-Mail アドレスのリストを事務局よりこっそりもらって帰ります。

ここで学んだ何をモニターするか

「まちあるき」を通じて関係者と仲良しになる方法をモニターします。

村上孝之（熊本市役所）



5年後の私

まちづくりが軌道に乗り、リーダーの皆さんと喜びを分かち合っています。今回の研修で学んだことを、現在事業中のまちづくり事業に生かし、住民の皆さんと十分会話をし、民官一体となった形で事業を進め、5年後には何らかの成果をだし、地元の人達と手を取り合って喜びたいと思います。

明日から実践すること

研修で学んだ内容を一人でも多くの人に伝授します。職場に持ち帰り、課内で研修会を開き、今まで以上に住民の皆さんとの対話を重視した業務に努めます。

ここで学んだ何をモニターするか

地域経営の手法を用い、まちづくりをモニターします。住民の皆さんとの対話の中で、地域経営、自己責任の精神を理解していただき、行政参加型のまちづくりを推進し、モニターします。

篠原弘夫（日本建設コンサルタント 株式会社）



5年後の私

まずはNPOまたは私的な「まちづくり会」等を勉強して、自分を鍛えます。そして学んできたことを生かすために会社に都市計画室なるものをつくります。

明日から実践すること

私はまちを散歩して、そのまちの魅力を探します。観光地でないところ、10万分の1地図には載っていない細い道路を歩きます。

ここで学んだ何をモニターするか

四面会議システムを実践し、モニターします。

プレーヤー：支社長、上司、自分、部下

テーマ：会社の出来事

神保正信（国土交通省 関東地方整備局）



5年後の私

役所をクビになってない限り、道路関係や地域づくりの仕事をやっていると思うが、いずれにしても、地域経営に携わっていると思う。個人においてはふるさとのまちづくりにも、1ヶ月に1度は何らかの形で参加していて、必要とされる人間になっている。また、今住んでいる地元の地域づくりに加わり、その仲間と議論している。

明日から実践すること

今回学んだことを復習し、今、直面している仕事への適用を考える。職場の中に知らしめる。ふるさとの人にもわかるように、説明しやすい資料等にす。地元地域で

活動している人に会うために情報収集する。

ここで学んだ何をモニターするか

ここで学んだ「四面会議システム」そのものの利用及び普及を考えている。

中井健介（社団法人 建設コンサルタンツ協会）



5年後の私

5年後の自分は、水環境整備に関連した協議会で、地域のリーダーをサポートする仕事をしているようになりたい。

明日から実践すること

自分の住んでいる地域での種々の問題を地域経営の眼で、今回学んだ整理の仕方、自分なりに評価してみる。

ここで学んだ何をモニターするか

四面会議システムの手法をモニターしてみます。

安野貴人（株式会社 ニュージェック）



5年後の私

私は今、今年で実務の6年目になります。何事も10年と考えれば、これから5年が後半戦になります。これまで5000~50,000人くらいの市町村の地域振興とか、マーケティング、リスクマネジメントというのを経験してきました。今後の挑戦として、まだやっていない都市が抱える、また大きくは日本が抱える、混雑、都市防災みたいなリスクマネジメントに挑戦していきたいと思う。

明日から実践すること

コンサルティングの落とし穴である関係者の意図を十分に酌んでいない、自分の得意な方に持っていきがち、こちらがわかったつもり、思い込みの提案、現地調査の甘さ（時間がない言い訳）といったことから、ベターな対応である

舵：アプローチ、地域が抱える課題解決、目指すべきテーマの追求

絆：初心を忘れず、キーパーソンの話を聞く、歴史や統計を押さえる

礎：多様なリクエストに応えるノウハウの向上

糧：代表者の意見収集、計画への反映

をやっていきいたい。

ここで学んだ何をモニターするか

私が一番印象に残ったのは寺谷さんの「その土地に住んだつもりで」という言葉。コンサルタントが来ても、どうせ思いやりないでしょうとか、どうせ住んでいないのにと言われたいようにしたい。

